

2020年度 学校評価を受けて

北星学園大学附属高校
学校長 今城慰作

はじめに

学校評価アンケートは、文部科学省が次のようにガイドラインと目的を提示しています。「教育活動等の成果を検証し必要な支援・改善を行うことにより、児童生徒がより良い教育活動等を楽しむことができるよう学校運営の改善と発展を目指し、教育の水準の向上と保証を図ることが重要である。また、学校運営の質に対する保護者等の関心が高まる中で、学校が適切に説明責任を果たすとともに、学校の状況に関する共通理解を持つことにより相互の連携協力の促進が図られることが期待される」これらのことから、本校も学校の教育活動、その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図ること、本校の教育の質の向上、学校運営の改善を目指すために外部にも公表を行うことにしています。

評価を受けて

2020年度は、コロナ禍にあって想定外の事柄が多発した。本校が大切にしてきたキリスト教の精神に立った全人的な教育は、感染予防の制限化の中で行うことを余儀なくされた。これからの時代は、今までの当たり前だった前提そのものを見直しつつ、模索して新しいものを創造していく必要がある。

特にコロナ禍において、生徒、保護者はもちろんのこと、地域の方々、教職員、その家族の健康、生命を守ることが最優先される事柄であることを再認識した。その点で、職場においては「働き方改革」を推進し、教育は臨機応変に対応しつつ、質を向上する工夫が必要である。

新しい教員が採用されたことによって、教職員は他校との比較において本校の在り方を指摘することができるようになってきた。異動のない私立学校において、築き上げてきた伝統と校風を守ることが大切でありそれを全否定する必要はないが、変化を恐れず研鑽していくことは大切である。様々な経験と立場をもった職員が意見を言い合える環境があることは素晴らしいと感じている。

数年前から大学の附属高校というメリットを活かし、学校選抜型推薦試験による系列校への進学は充実しており、独自のオープンキャンパスや、大学教員による説明会など時期を見極めながら進学指導の機会を設けている。2020年度は、オンラインを使つての独自の説明会を催してもらえたことも、スケールメリットを活かすことができた活動であった。生徒のアンケートでは、一般受験に対応するための外部模試は十分に活用できていないと認識されている。学内の定期試験、評定平均は、学内における評価の指標であるが、全道、全国の中では非常に狭い集団での評価に過ぎず、外部模試は道外の高校も含めた他校の学力との客観的な指標である。本校で自己完結せずに、外部模試等の活用によって学力向上の取り組みの一層の工夫が必要である。国公立大学への合格者を生み出したことは、新しい入試制度へ対応できていたことも評価できる。しかし、今年状況に甘んじることなく分析を続けて、生徒が望む進路実現に向けての指導体制の充実を模索していきたい。

各教室の大型モニターの設置、Wi-Fi設備など、施設は順調に整備されてきた。またタブレットPC(リース契約)を全生徒に配布するなどを行った。まだ教員も模索状態ではあるが、徐々に活用が浸透してきている。コロナ禍で4月に臨時休校になった際には、新入生にタブレット配布が完了しておらず、活用できなかったこと

は残念であった。

生徒達が安心して学校生活を送れるよう、いじめの問題を把握するアンケートを実施している。体罰・ハラスメントアンケートでは、クラブ活動において信頼関係が構築できておらず、慎重に調査した結果ハラスメントと認定する事例が発生した。深く反省し生徒・保護者に対して誠意をもって対応することを心がけていきたい。また各教員が情報を共有し合い、生徒達が人間関係の中で成長できるように取り組んでいきたい。

細やかな対応を心掛けたいが、教員の多忙感がそれを妨げていることを否めない。そのような中で、働き方改革を進めつつ、正確な情報を、適切なタイミングで、配慮ある言葉をもって生徒に伝えるために、教員間のチームワーク、教育共同体として互いを尊重し、コミュニケーションに必要なスキルを互いに研鑽していきたい。